

## 映画の創出とルイ・リュミエール〈その2〉

グラン・カフェにおけるシネマトグラフ一般公開

(1895年12月~1896年12月)

永 治 日 出 雄

Hideo NAGAYA

(ヨーロッパ文化選修)

### I パリ・オペラ座界限とシネマトグラフ一般公開への布石

1895年3月より学術的・専門的な集会で試写を重ね、マスカルなど学界の重鎮から絶讃されたリュミエール一家は、シネマトグラフ一般公開のため意欲的で周到な用意を進めた。みずから陣頭に立った家長アントワーヌは、まずクレマン・モーリスを首都在住のリュミエール代理人に指名する。かつてリヨンのモンプレジール工場で共同経営を担ったモーリスは、ナポレオン三世専属の写真家ディデリの敷地とスタジオを買い取り、パリ・オペラ座周辺のイタリア大通り8番地に営業の拠点を据えた。同じ敷地の2階にはロペール・ウダン劇場が構築され、奇術師ジョルジュ・メリエスが観衆を陶醉させていた。なお、一層オペラ座に近いキャブシーヌ大通り35番地では肖像写真の大家ナダールがスタジオを構え、1874年にそこで印象派の画家ルノワール、マネ、ピサロが最初の展覧会を開いている。こうした世紀末のグラン・ブールヴァールで写真業者モーリスも多くの芸術家や興業主と係わりを深めた<sup>(1)</sup>

オペラ座はオースマンの都市計画とガルニエの建築設計に基づいて1862年起工され、パリ・コミュン前後の中断を経て1875年に落成した。この殿堂は当代のヨーロッパでもっとも豪華な歌劇場とされ、1892年にサン・サーンス作曲『サムソンとデリラ』の国内最初の公演が、1894年にはマスネ作曲『タイス』の初演が行なわれた。また、至近の距離にあるヌヴォテ座(イタリア大通り28番地)では1872年にドーデ原作ビゼー作曲『アルルの女』、1893年にサルドゥ脚本レジャヌ主演『無遠慮夫人』が披露されている。通俗喜劇を得意とするヴォードヴィル座(キャブシーヌ大通り2番地)、仏教寺院を模した楽園座(ブドロワ街7番地)も人気を博し、シャンソンなどの舞台公演で名高いオランピア劇場が1893年キャブシーヌ大通り28番地に建造される。見世物や劇場が軒を並べるグラン・ブールヴァールで、サン・ドニ界限がきわめて庶民的であるのに対し、オペラ座界限は上流の階層をも客筋とした。<sup>(2)</sup>

こうして十九世紀後半にオペラ座界限はグラン・ブールヴァールの中核をなし、フランスひいてはヨーロッパにおける観劇・観光の中心となった。広場を隔てオペラ座と斜めに向き合うグラン・ドテルも、1867年の万国博覧会に備えてキャブシーヌ大通り12番地に構築された。この五階建て高級ホテルは快適な客室800のほか、ガルニエの設計による大広間、

シャンデリアに輝く大食堂、中庭や読書室や演奏会場を擁し、ヨーロッパ諸国だけでなく、アメリカやアジアからの観光客を歓待する。また、1階に設けられたカフェ・ド・ラ・ペにはドーデ、ワイルド、ルナール、ヴァレリーなどが常連となり、パリを遊歩する地方人や外国人も好んで立ち寄った。なお、グラン・ドテルは西隣りのホテル・スクリーブを別館とし、とくに静寂を好む顧客を滞在させた。映画誕生の地とされるグラン・カフェは、こうしたホテル・スクリーブの一階および地階を占め、正面はキャプシーヌ大通り14番地、西側はオーベル街に位置する。<sup>(3)</sup>

リュミエール一家から委嘱をうけたクレマンは、瀟洒なグラン・カフェに着目し、地階のインド広間をシネマトグラフ一般公開のため選定した。この会場は100平方メートルの広さを持ち、観客も120人ほど収容できる。インド広間には東洋風の装飾が施され、大通りから螺旋状の階段が通じていた。<sup>(4)</sup>最初のシネマトグラフ一般公開を実見し、のちに古きパリ保存協議会の委員にもなったヴィクトル・ペローは、この会場について以下のとおり回顧する。

ホテル・スクリーブの壮麗な2階は、その地域全体と同じく第二帝政の末期に建造され、競馬クラブの本部とされていた。そこでは無数の電球を配した特大のシャンデリアが、円形の大広間を燦然と照らし、歩道を行く人々を感嘆させた。グラン・カフェはその1階を占め、奥の一部に豪華なレストランを設けた。そこには白色と金色の装飾が施され、寓意的な天井画が描かれている。ほかにも広壮で高雅な広間がいくつかあって、12台の撞球台を備え、球戯愛好クラブの会合場所にも供された。

正面玄関は大通りの14番地にあった。そこから数歩隔ててより小さな入口が見出され、「インド広間」という階段の表示が読み取れる。東洋の謁見室を思わせる地階の装飾と備品がそれまで不評であり、シネマトグラフの映写に合うよう模様替えされていた。<sup>(5)</sup>

インド広間の賃貸についてクレマンはグラン・カフェの所有者ヴォルピニと交渉し、入場料の2割提供を申し入れた。これに対しヴォルピニはシネマトグラフの成果に不安を抱き、1年契約の貸室料1日30フランを要求する。こうした事情もあって当初の入場料は1名1フランと定められ、ほかの観劇に比しやや割高となった。<sup>(6)</sup>なお、当時の1フランは1992年現在の貨幣価値で20フラン（500円）程度と思われる。

クレマンの支援を受けてアントワヌ・リュミエールは、シネマトグラフ一般公開の初日をクリスマスから元旦までの間に設定した。毎年この祝日週間には無数の小屋と露店がグラン・ブールヴァールに連なり、さまざまな遊技や考案で群衆を惹きつける。また、大道を逍遥する閑人、野次馬、家族ずれに多くの劇場が新規の番組を差し出し、顧客を殖やすのに熱心である。平素でもグラン・カフェの左手はオランピア劇場やマドレーヌ寺院への人波が絶えず、右手ではカフェ・ド・ラ・ペが昼夜繁盛していた。新たな次元における文化を成立させるため、アントワヌは最適の時期と場所を選んだと言える。<sup>(7)</sup>

シネマトグラフ一般公開の初日は1895年12月28日土曜日であり、パリにおける興行の慣例に従って同日午後1時に総仕上げのリハーサルが行なわれた。また、新聞・雑誌の学術担当記者とともに、幾名かの劇場支配人はインド広間への招待状を受け取った。フォリ・ベルジュール劇場のラルマン、ロペール・ウダン劇場のジョルジュ・メリエス、クレヴァン博物館人形室のトマスなどがそれである。<sup>(8)</sup>のちに世界最初の演出スタジオを設立し、フィ

クション映画の創始者と讃えられるメリエスは、この日の招待を以下のとおり想起する。

1895年イタリア大通り8番地ロベール・ウダン劇場の階下には旧ディデリ写真撮影所があり、エミール・トゥールタンの所有になっていた。父リュミエール氏は頻繁にそこへ来た。都合よくその家屋で写真乾板を調達できるからである。劇場の詰所を出たあたりで、私はしばしば同氏に出会い、面識をもった。ある夕宵5時頃に彼は晴れやかな顔でやってきて、私に言った。

「今夜はお暇ですか」

「暇ですよ」と私は応える。

「9時にグラン・カフェへ来てください。奇術で全世界を〈驚嘆〉させているあなたですが、あなた自身が〈驚嘆〉するなにかをお見せしたいと思います。」

「本当に？なんですか、それは。」

「黙って!」と彼は制した。「おいでになって、ご覧ください。足を運ぶのに値します。いまはこれ以上お知らせしたくありません。」<sup>(9)</sup>

## II グラン・カフェにおけるシネマトグラフ一般公開の初日

映画誕生の歴史的なタベとなった1895年12月28日、リュミエール一家の家長アントワヌとその代理人モーリスがグラン・カフェで立ち会った。シネマトグラフの操作を担当したのは、リュミエール工場の主任機械技師モワッソンであり、デュコムおよびドゥブリエのふたりがこれを補佐した。<sup>(10)</sup>当時徒弟であったドゥブリエは、シネマトグラフの取り扱いとインド広間での歴史的な映写を、半世紀のちに語る。

パリのグラン・カフェでなされたシネマトグラフ・リュミエール第1回上映に、私は参加させて頂きました。主任機械技師シャルル・モワッソンと映写装置を回わしました。食事のときだけはふたりが席を離れます。そんなわけでモワッソンとデュコムが食事を摂る間、私がインド広間のスクリーンに『蹄鉄工』、『カルタ勝負』、『嬰兒の喧嘩』を映写したのです。ただし、私がそこに派遣されたのは、なによりもロールフィルムを運搬するためでした。

その2年前から私はリヨン・モンプレジールのリュミエール兄弟、オーギュストとルイのもとで働いていました。徒弟奉公をしていたのです。朝から夕まで現像タンクを清掃したり、実験室の瓶類を水洗いしました。また、必要に応じて床の掃除も行いました。しかし、ルイが新しい試行を始めると、私はロールフィルムを回わしたり、洗ったり、乾かすことを覚えました。要するにすべてを為しうる徒弟になったのです。こうして私は徐々に手ほどきされ、シネマトグラフの秘密に触れました。

厳重に守られた秘密と言ってもよいでしょう。その器機の仕組みを見ることがだれにも許されなかったからです。<sup>(11)</sup>

シネマトグラフの興行に招待された学術担当記者や劇場支配人はアントワヌとモーリスの接待を受けた。こうした人たちのなかでメリエスの回想が、グラン・カフェ初日の証言として著名である。さきに引用した叙述に続いて、彼は12月28日のインド広間を如実に描写する。

私は好奇心を掻き立てられ、アントワヌの招待に応じた。そして、なにを観るか判らないまま、グラン・カフェへ定刻に赴いた。

私や招かれたほかの人たちの眼前に小さなスクリーン、モウトゥニの投影に用いられたようなスクリーンが拡げられ、まもなくリヨンのベルクール広場を撮した〈動かない〉写真がそこに投影された。すこし呆れて私は隣の人に眩きかける。

「こんな投影を見せるため、私たちに足を運ばせたのか。これなら十年以上もまえから自分で見せている。」

こうした囁きを終わらないうちに、一台の馬車が私たちの方へ前進し、そのあとにはほかの車や通行人、一言で表わせば、街路で動くあらゆるものが続いた。この光景を眺めて私たちはみな口を開けて茫然となり、極度なまでに仰天した。これに続いて次々と現われた。『解体業者のツルハシに打ち砕かれて塵の山となる壁』、『列車の到着』、『スープを飲む嬰兒』、『風で枝葉の動く樹木』、さらに『リュミエール工場労働者の退出』、最後に名高い『水を撒かれた庭師』が。

上映が終る頃には、熱狂状態となった。そして、いかにしてこのような成果に達したか、とだれもが不思議に思った。

上映が終了するや否や、私は器械の一組を自分の劇場のために買い取りたい、とリュミエール氏に申し出た。同氏は拒否した。それでも私は巨額と思われる買値1万フランまで引き上げた。グレヴァン博物館長のトマス氏も私の考えに同調し、2万フランまで提示したが、無駄であった。最後にはやはり居合わせたフォリー・ベルジェールの劇場支配人ラルマン氏が、5万フランまで申し出た。徒労である。リュミエール氏は一徹さを変えず、質朴な態度で私たちに応えた。

「この器械は大きな秘密です。売ろうとは思いません。自力で独占的に開発したいのです。」

一方では魂を魅了され、他方ではひどく失望し、落胆しながら、私たちは立ち去った。なぜなら、この発明に約束された絶大な金銭的成功を即座に読み取ったからである。<sup>(12)</sup>

映画・演劇の名女優エレヌ・デュドネは当時8歳であったが、一般公開の初日父親に伴われてインド広間に居た。1970年映画の誕生を偲ぶ日刊紙『ル・モンド』の特集にに応じて、彼女は遠い日の記憶を繰った。メリエスなど炯眼な玄人筋の興奮とは対照的に、デュドネの証言は少女の素朴な印象を伝え、シネマトグラフに対する反響の複雑さを感じさせる。

その日は私の誕生日に合致し、年末の祝日週間でもありました。当時ブルヴァール喜劇役者の座長であった父が、私に言いました。「オペラ座近くのグラン・カフェで新種の見世物が出される。面白そうだ。行ってみよう。」上映はカフェの地下室を整備して為されました。遠い昔の記憶ですが、会場をすこしは想起できます。居合わせた人はあまり多くありません。その歴史的な上映に臨んだのは、私たち数十人だけでした。また、歴史的なものになるという予感を、当日の上映はすこしも与えません。私の父や観衆を見ても、なんら特別の喝采も興奮の叫びもありません。こうした戯れからいかにして偉大な発明が産み出されたのでしょうか。私には判りません。映像はきわめてぼんやりとし、途切れがちでした。見るのに疲れます。なぜ人々がこれほど早く走り、これほど急いで工場を退出するのか、と素朴に思いました。なぜなら、そのとき私が最初に見た作品、そして映画の歴史におけるまさしく最初の作品が、『工場の出口』

## すべてはこの映画から始まった

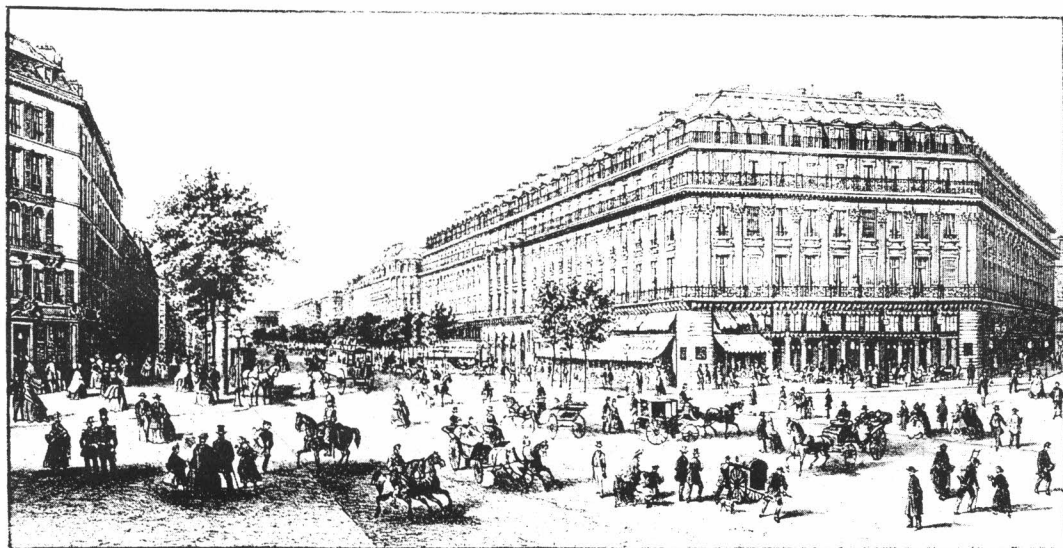
ルイ・リュミエール製作『ラ・シオタ駅における列車の到着』（作品整理番号653）



私は、前世紀に上演された天才の映画『列車の到着』をいまだに忘れることができない。すべてはこの映画から始まったのだ。…列車が近づいてくるにつれ、客席はパニック状態になっていた。観客は席を立ち、逃げ去る。この瞬間、映画芸術が誕生した。…芸術史上はじめて、文化史上はじめて、人間は直接時間を表現する手段を見出したのである。それと同時に、この時間の流れを幾度でも好きなだけスクリーンに再現し、そこに戻っていく可能性を見出したのである。

— アンドレイ・タルコフスキー

（タルコフスキー著、鴻英良訳『映像のポエジア』キネマ旬報社、1988年。p. 89）



版画 19世紀末におけるキャブシヌ大通りとグラン・ドテルの偉容（パリ市史料館所蔵）

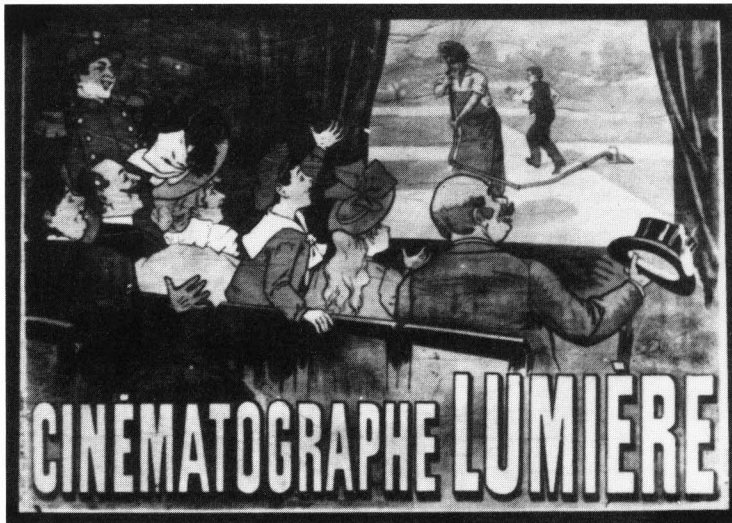
シネマトグラフの出現をあたかも昨日の出来事のように私は思い出す。それは1895年の歳末であった。…アルザス地方の家庭で私はしがない教師をしていたが、間違いなく日曜の夕宵、同家の女主人が極度に興奮して食事のため戻って来た。というのは同日の午後パリの劇場ないしはホテルで最初のシネマトグラフ一般公開に列したからである。こうした発明によってどこへ導かれるかを、そのとき私たちは予感した。

—エドゥワール・エリオ

Aux obsèques d'Auguste Lumière, Edouard Herriot prononce son éloge. dans *Cls.* 6. 322.



シネマトグラフ一般公開を描いた第2のポスター  
(ラングロワ映画史料館所蔵)



ルイ・リュミエール製作  
『水を撒かれた庭師』  
(作品整理番号99)

スクリーンに映されたのを眺めると、リュミエールの作品のいくつかには、幻想的と自称する若干の絵画よりも、はるかに豊かな幻想が認められる。ある程度税関吏ルソーの絵画を想わせるもの、すなわち、なんらの付加も削除も行わずに、現実を複写するというきわめて真摯な欲望が、リュミエールの作品のなかに存在する。こうして世界の創造が達成され、現実に存在しながら、より高次の可能性としても存在する世界の創造が実現される。これこそ税関吏ルソーの構想力であり、皇帝を撮すためザンクト・ペテルブルクへ、法王を撮すためローマへ赴く映写技師の構想力である。

— ジャン・ルノワール

Eric Rohmer, Jean Renoir, Henri Langlois(1968), dans *Cls.* p. 329.

**LE CINÉMATOGAPHE**  
**SALON INDIEN**  
Grand Café  
14, Boulevard des Capucines, 14  
PARIS

Cet appareil, inventé par MM. Auguste et Louis Lumière, permet de recueillir, par des séries d'épreuves instantanées, tous les mouvements qui, pendant un temps donné, se sont succédé devant l'objectif, et de reproduire ensuite ces mouvements en projetant, grandeur naturelle, devant une salle entière, leurs images sur un écran.

**SUJETS ACTUELS**

|                                                   |                                   |
|---------------------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. La Sortie de l'École NORMALE à Lyon.           | 5. Les Forgerons.                 |
| 2. La Telle.                                      | 6. Le Jardinier.                  |
| 3. La Pêche aux Poissons Boques.                  | 7. La Bague.                      |
| 4. Le Réajustement du Coq de Photographie à Lyon. | 8. La Saut à la Coquette.         |
|                                                   | 9. La Prise des Carillons à Lyon. |
|                                                   | 10. La Mer.                       |

Premier programme du Cinématographe Lumière au Grand Café, décembre 1895.  
Page présentée à la première séance.

グラン・カフェにおけるシネマトグラフ  
一般公開1896年1月9日のプログラム



1895年頃のグラン・カフェ photographie  
de la collection borge dans *Cl.* p. 95.



だったのです。10分程度の上映が幾回か為され、人々は席料として1フランを払いました。つぎの数日にも父は私をそこへ連れていき、『水を撒かれた庭師』、『ラ・シオタ駅における列車の到着』を見せてくれました。勿論人々は愉快に感じたものの、仰天などしません。いかなる人物もいかなる新聞もこの発明についてなんら言及せず、ここに秘められた真の効力を見落とししました。粗雑な装置で造られた貧弱なもの、物笑いになりかねぬものと思われたのです。<sup>(13)</sup>

なお、一般公開の初日についてメリエスやデュドネとやや異なる報告を遺すのは、科学アカデミー会員カルパンティエである。この著名な物理学者はみずからも光学器械を考案し、モワッソンとともにシネマトグラフの製作を依頼されていた。1895年12月30日付の書翰で彼はルイ・リュミエールにつぎのように誌す。<sup>(14)</sup>

拝啓。あなたのシネマトグラフにいまや新しい発展の局面が拓けました。土曜日の夕べ〔1895年12月28日〕広間で初めて披露され、美事な成功を収めたのです。衷心からお祝い申し上げます。不幸にも私はこの記念すべき催しに列しておりません。印刷された回状によって前日初めて知ったので、ほかの約束を解消できなかったのです。しかし、直前に義弟ヴィオレ氏と友人カルティエ氏を招待して頂き、出席者全員に与えられた深い感銘を両氏は私に伝えてくれました。

きわめて沢山の人が集まりました。当然のことです。あらかじめ通知を頂戴し、快く勧誘できる友人の若干をも招いてくださるとよかったです。初日の混雑をさらに酷くする危惧があったのでしょうか。<sup>(15)</sup>

グラン・カフェにおけるシネマトグラフの興行は、実業家として豊かな経験を持つ父アントワヌ・リュミエールの主導で推進され、モワッソンなどモンプレジール工場の関係者が技術面を担当した。厳密な意味では次男ルイがシネマトグラフの発明者であるが、パリにおける興行の手配をすべて父親に委ね、兄オーギュルスとともに当日リヨンに留まった。初日の接待について多少の不満を述べるカルパンティエに、ルイは父アントワヌとの関係を同月31日付の返書で説明する。

先週土曜日〔12月28日〕の上映に関してお知らせ頂いたことに、兄も私も当惑しています。私たちが不在であったのは、大した理由からではありません。パリにおける興行の用意をはっきり一任し、まったく干渉しないよう、私たちが父から言い渡されたのです。高名なリシャール商会がデュコムから入場券を入手したのだと思います。なぜなら、デュコムはクレマン・モーリスの友人であり、父はモーリスの協力を大変頼りにしています。<sup>(16)</sup>

### III シネマトグラフ一般公開に対する公衆の反応

1895年12月28日グラン・ブルヴァールのは話題は主として女歌手イベット・ジルベールの結婚に傾いていた。歳末の寒い夕宵マドレーヌ寺院とオペラ座の間を遊歩する人々は、グラン・カフェの前で案内書を受け取っても、勧めに応じて螺旋階段を降りることは躊躇した。<sup>(17)</sup>専門的・学術的な集会で成功によってアントワヌらの自信を固めたものの、シネマトグラフに対する一般市民の反応は当初まったく別であった。インド広間における興行を主催したクレマンは、初日の観客がわずか33名であったと回想する。

リュミエールと一緒にグラン・カフェの広間を借り切った私たちは、この見世物が

たちまち成功することを疑わなかった。広間には100名ほど収容でき、入場料は1フランと定められた。

初日33フランの収入を得た。なんと憐れなことか！だが、急速に成功に向い、それ以後の3週間は1日2000フランから2500フランに及んだ。新聞などに援護される必要もなかった。〔中略〕

約20分の上映時間で8本から10本の作品が投射された。即座に広間を空席にし、新たな客を入れる。数週間には地階入口の混雑やときには争闘を防ぐため、警官による規制を依頼した。〔中略〕

きわめて象徴的な状況を私は覚えている。すなわち、道を行く人が入口で立ち止まり、シネマトグラフ・リュミエールの標示を探す。入ることに決めると、思案するかのように一旦そこから離れ去る。そして、ブールヴァールで出会えるあらゆる知己を引き連れて、まもなくそこへ戻って来るのである。

午後には公衆が行列をなし、ときには300メートルあまり離れたショーマルタン街にまで延びた。<sup>(18)</sup>

こうしてシネマトグラフの映写はパリ市中に爆発的な人気を呼び起し、インド広間へ日々2000人以上の観衆が押し寄せた。当初の契約どおり第一次興行は1896年の末まで続けられるが、最低でも日に1500フラン、週末などには3000フラン、最高では日に5000フラン（1992年現在の換算で概ね250万円）の収入に及んだ。メリエスが申し入れた巨額の買値1万フランを、僅か数日の売上げが凌ぐわけである。以後1900年までの5年間にシネマトグラフは300万フラン（現在の時点で換算して約15億円）の純益をもたらした、とのちにルイ・リュミエールは語った。<sup>(19)</sup>

一般公開第2日以降の盛況を伝える記録として、ジャン・ド・パンジュ伯爵夫人の自伝も貴重である。上流社会で育てられた彼女は、伝統を有する月刊雑誌『両世界評論』への連載で、67年前の体験を以下のとおり綴った。

ひとつの新しい発明、動くものを再現する写真について人々が語るのを、私も耳にしました。一緒にそれを見に行こう、と父が約束してくれました。私はまだ観劇も、サーカスすら知らなかったのです。だから、父の言葉に驚きもし、胸をときめかせました。それは1896年の1月でした。夕方お菓子を食べたあと、父と箱馬車に乗り、パリのまだ知らない界限に着きました。バス・デュ・ランパール街に続くキャブシーヌ大通りだったのです。一旦逆の方向に歩いて、歩道に溢れる長蛇の列に従うことが必要でした。切符売場で並ぶ習慣を持たぬ父は、苛立ちと腹立しさを覚え、国会議員の身分証を提示しましたが、無駄でした。やっと1フランの席料で狭く細長い部屋に通されます。奥の暗いところにぼんやりとスクリーンが見えました。3列目か4列目の椅子に座ったので、印象ははっきりしています。しかし、驚嘆すべき動く映像、リュミエール兄弟の第1号シネマトグラフによる映像が眼前に展開するのを見たとき、私の印象は格段に強烈なものとなりました。〔中略〕まさにそれは夢幻の世界でした。公衆は感嘆し、拍手で讃えました。上映の時間は20分ほどにすぎません。たちまちシネマトグラフは関心の的となり、絶大な成功を収めました。けれども、一般にはそれをロベール・ウダンの魔術幻燈の改良と考え、子ども向けの見世物に赴く高位高官を私の祖母も揶揄したのです。<sup>(20)</sup>



グラン・カフェでの興行に際してシネマトグラフ・リュミエールを印象づけるふたつの彩色ポスターが掲げられた。最初のポスターはブリスボの落款を付され、入口で交差する観客の群れが描かれている。毛皮のコートを纏った貴婦人、山高帽を被った紳士、白い顎髭の聖職者、かつまた警備にあたる巡査など。また、第2のポスターは縦1メートル半、横2メートルほどの巨大なリトグラフであり、オゾーレの落款でややのちに張り出された。そこではインド広間の様子が一層美しい色彩で表現されている。スクリーンに『水を撒かれた庭師』が映写されて、客席の紳士淑女は感極まり、同伴の子どもも手を振る。シネマトグラフの内容は健全な日常生活を写し、その客筋も良家の市民であることを、これらふたつポスターは訴えている。<sup>(21)</sup>

加えて同じパリ・オペラ座の仮面舞踏会でシネマトグラフが披露され、グラン・カフェの観客とは異なる階層にも声価を広げた。ますます殖える観衆に応じるため、グラン・カフェに近いオランピア劇場オラー館、カフェ・コン・エルドラド、百貨店デュフェールを会場としてもシネマトグラフが映写され、ついに同年5月サン・ドニ大通り6番地に映画館シネマトグラフ・リュミエールが開設した。リュミエール一家の本拠リヨンでもパリにおける盛況が伝えられ、早くも1月25日目抜きで共和国街1番地に上映会場が造られた。そのほか地方における一般公開は、2月のボルドー、3月のランス、4月のモンペリエなど枚挙に暇がない。<sup>(22)</sup>

#### IV シネマトグラフ一般公開に対する新聞・雑誌の反響

シネマトグラフの興行開始はパリの大新聞から完全に黙殺された。当時60万部を発行する『プティ・ジュルナル』を筆頭として、『プティ・パリジアン』、『ル・マタン』、『ジュルナル』の4紙が、首都での新聞印刷総数において4分の3を占めていた。しかし、グラン・カフェでなされた壮挙は日刊紙『ル・ラディカール』および『ラ・ポスト』の紙面でただちに伝えられる。とくに『ル・ラディカール』は急進派の格調ある新聞として発行部数4万に達し、ヴァルデク・ルソーの率いる左派連合内閣を支援していた。<sup>(23)</sup>

##### シネマトグラフ：驚嘆すべき写真

この時代におけるもっと珍奇な事物のひとつ、しかもきわめて稔り豊かな新発明が、学者、教授、写真家などの公衆に昨夕キャプシーヌ大通り14番地で披露された。これによれば活きた光景が一連の陰画に撮影され、投射によって再現される。人生の営みにおいていかなる光景、いかに多くの人物を撮そうとも、それらは実物大かつ色彩つきで再現され、遠近、天空、家並、街路を伴って、現実生活のあらゆる陰影のもとで眺められる。

『鍛冶屋の光景』がその一例である。ひとり吹子を動かし、炉から煙が出ている。ほかのひとり鉄を取り出し、敷台の上で叩く。それを水に浸すと、白い蒸気が大きな円柱となって昇る。

『リオンの眺め』では電車、馬車、通行人、散歩者がすべて活動し、一層印象的である。だが、もっとも深い感銘を与えたのは、『海水浴』である。ここにおける海は真に迫り、茫洋と拡がり、色彩豊かで躍動的である。また、泳ぎ手や潜り手が跳躍台に駆け登り、頭から飛び込むのは、驚嘆すべき真実のひとつである。

また、新しい器械が発明された工場から、職員すべてや馬車が〈退出〉する作品も

とくに注目される。この器械には〈シネマトグラフ〉というややなじみにくい名称が与えられた。

工場の経営者リュミエール氏もそれを弁明された。彼の息子、オーギュスト・リュミエールとルイ・リュミエールの両氏が発明者であって、昨日絶大な拍手を受けた。

前景に生じる振動を減少させれば、彼らの器械は真の驚異となろう。振動を皆無にすることは不可能に近いとしても。

私たちはすでに音声を収録し、再現した。いまや生を収録し、再現するのである。

たとえば、肉親を喪ったはるかあとにも、彼らが活動するのを見ることができる。<sup>(24)</sup>

『ル・ラディカール』の記述はインド広間での感銘を美事に表現するものの、映像の色彩やリュミエール兄弟の出席を語るなど、細部についてかならずしも正確でない。同じく歴史的な一タを報道したものとして、12月30日付の日刊紙『ラ・ポスト』にも類似した記事が見出される。<sup>(25)</sup>この貴重な史料はリュミエール家の新聞ファイルに保存されているが、『ラ・ポスト』はかなり小規模の刊行物であつたらしく、フランス国立図書館編纂の膨大な『定期刊行物文献・所在総覧』にも記載がない。

なお、翌年1月13日に同じグラン・カフェ地階で、レントゲンによるX線の試写が成功した。さきにリュミエール一家を激励した国立工業奨励協会は、天然色写真の開発とともにこうしたX線の研究をも支援していた。<sup>(26)</sup>定評ある週刊誌『挿絵ル・モンド』1月25日号は、これらの発明を写真の大なる前進と称賛し、シネマトグラフの機能を図解入りで紹介した。

ドイツの学者レントゲン氏が不透明な物体を透して一定の対象を美事に撮影した、ときわめて最近報道された。たとえば、鞘を透して刃を、筋肉を透して骨格を撮影できると言う。〔中略〕

同じく写真の領域に属し、それほど神秘的ではないが、最近発明されたひとつの器械が、公衆の熱狂的な眼差しを浴びている。リュミエール氏の〈シネマトグラフ〉がそれである。シネマトグラフとはギリシア語の合成であって、運動の記録を意味する。実際この器械の目的は生を再度生産し、さまざまな運動をあらゆる様態において再現するところにある。すなわち、活気のある街路、仕事をする労働者、微笑する子ども、通り過ぎる自転車、吸われているタバコ、腰に当てられた両手を。こうした目的が達成できると、いろいろな現象の局面を連続的に記録できるので、シネマトグラフの応用が諸々の学問に絶大な利益をもたらす。また、世間一般で用いられても、シネマトグラフは静止した冷たい映像の代わりに、生けるがごとき肖像をついに造り出す。これまでの映像は優美で魅力的な姿態を表現すると称されながら、本物とは似ても似つかぬものであった。<sup>(27)</sup>

これらの史料から読み取れるように、シネマトグラフへの関心は多種多様な階層へと拡大する。たとえば、青少年向けの雑誌『挿絵ル・プティ・フランセ』では版画家ジョルジュ・コロンプが1896年5月23日とくに『壁の解体』を分析し、リュミエールの作品を生ける映像と称賛した。

パリでは数カ月前から小型の珍らしい器械が動いている。ひとつの魔術幻燈であるが、驚くほど整った類のない魔術幻燈である。白いスクリーンに投射された沢山の人物が、動かない彫像のように固定したままではなく、行ったり、来たり、行動したり、

活動したりする。こうして驚く観衆の前に現実と生の完全な映像が現われる。たとえば、ツルハシやクワやテコを持ち、壁を解体する労働者の映像がスクリーンに登場する。一瞬これらはすべて動かない。しかし、すぐに光景は動きだし、ツルハシとクワが力強く振られ、壁は掘り崩され、テコが揺さぶり、現場監督はあちこちに走る。ついでこれら労働者が力を合わせて、壁は土台から動揺し、しだいに傾き、ついには地上へ倒壊する。そして、濛々たる砂塵が立ち昇るなかで、労働者はいったん消え、やがて砂塵の消散とともにふたたび現れる。<sup>(28)</sup>

#### IV グラン・カフェにおいて上映された映画作品

グラン・カフェにおける興行のためにリュミエール一家は約60本の映画作品を用意していた。ほとんどが1ショット1分たらずの長さにすぎず、もとより白黒のサイレント映画である。本稿〈その1〉で検討したとおり、それらの相当数は1895年11月以前に学術的・専門的な集会で披露されている。インド広間での上映に際しては各10本程度の作品が提供され、適宜組替えも行なわれた。<sup>(29)</sup>初日には劈頭『工場の出口』が映写され、『水を撒かれた庭師』も感銘を与えたことはほぼ確実である。しかし、歳月を経た観客の証言では、ともすれば別の日の上映が混同されるので、12月28日のプログラムを明言するのは困難である。

かつてリヨンでルイ・リュミエールに音楽を教えた教師マンガンは、1896年1月9日法学生である息子とその友人ペローをインド広間へ誘った。そこでペローは天啓ともいうべき靈感を授けられ、当日のプログラムを終生大切にした。現在のところこれが一般公開最古のプログラムであり、以下にその全文を訳出する。<sup>(30)</sup>

#### シネマトグラフ

グラン・カフェ＝インド広間      パリ＝キャプシヌ通り12番地

オーギュスト・リュミエールおよびルイ・リュミエールの両氏によって発明されたこの器械によれば、カメラのまえで一定の時間に為されたあらゆる動きを、一連の早撮りプリントに収録することが可能であり、またそれに引き続いて広い部屋のスクリーンに映像を投射し、そうした動きを実物大で再現することが可能である。

#### 本日の題目

- |                      |               |        |                 |
|----------------------|---------------|--------|-----------------|
| 1 リヨンにおけるリュミエール工場の出口 | 2 曲芸          | 3 赤魚釣り |                 |
| 4 写真協会大会＝リヨンにおける下船   | 5 鍛冶屋         | 6 庭師   | 7 食事            |
| 8 防護部隊における跳躍訓練       | 9 リヨン・コルドリエ広場 | 10 海   | <sup>(31)</sup> |

激増する観衆の求めによってまもなくグラン・カフェでは、作品12本の上映が毎日20回繰り返された。フィルムの装填に多少手間取り、また観客の総入れ替えを行うため、各回は30分程度であったらしい。こうしてシネマトグラフの映写は午前10時から始まり、昼食2時間と夕食1時間の休憩を挟んで、深夜1時間半に終るのが常であった。

ここで上映された作品のなかで、人々にとりわけ強烈な衝撃を与え、新しい時代の到来を告げたのは、『ラ・シオタ駅における列車の到着』である。また、これまで列挙した証言

からも察せられるように、『工場の出口』、『リヨン・コルドリエ広場』、『壁の解体』も活気ある画面の展開で観客を魅了した。これらシネマトグラフ初期の傑作はほとんどがルイ・リュミエールによって製作されたものである。したがって、新しい器械の発明者ルイは、いわば人類最初の映像作家としても評価される。逝去する5カ月前の1948年1月6日映画史家サドゥールとの最後のインタビューで、彼は『列車の到着』などの製作についてつぎのように言い遺した。

サドゥール：撮影と映写をともしうる唯一の器械を、1895年にはあなただけが有していたのですから、その年にはあなたがシネマトグラフで撮影できる唯一の映写技師だったわけですね。

ルイ・リュミエール：まさしくそうです。1895年に映写されたすべてのフィルム、6月リヨンにおける写真協会大会のそれらも、7月パリにおける『科学一般評論』におけるそれらも、また1895年12月28日以降グラン・カフェ地階におけるそれらも、みな私が映写技師として作ったものです。ただひとつの例外は『草焼き』であって、これは兄オーギュストが休暇にラ・シオタの別荘で撮影しました。さらに言えば、これらの映像を撮影しただけでなく、私はホウロウ鉄板製のバケツの中にまず現像液を、ついで洗滌液と固定液を入れ、グラン・カフェで映写する予定のフィルムすべてを現像したのです。陽に照らされる白い壁が光源としても、陽画を感光させるのにも役立ちました。〔中略〕

サドゥール：『列車の到着』についてはどうですか。

ルイ・リュミエール：1895年にラ・シオタ駅で私が撮影しました。一方の手を母親に、他方の手を小間使に預けて、跳ね回る少女がプラットホームに見えるでしょう。この子どもが私の長女、トラリュエ夫人であって、現在は4人の孫があります。私の母アントワヌ・リュミエール夫人が彼らと一緒にいて、それはスコットランド風のケーブで判ります。

サドゥール：『列車の到着』はグラン・カフェで絶大な成功を収めました。機関車がスクリーンに現われると、狼狽した観客は椅子ごと避難しましたね。敷き潰されてはいけな、と。<sup>(32)</sup>

また、当初からはほとんど欠かさず上映され、彩色ポスターにも描かれた『水を撒かれた庭師』は、素朴ながら劇的な要素と演出の効果を示す作品として注目される。同じインタビューのなかでルイ・リュミエール自身はこの作品についても撮影の経緯を説明する。

サドゥール：最後に著名な作品『水を撒かれた庭師』について話して頂けますか。

ルイ・リュミエール：とくにはっきり覚えているわけではないが、このシナリオは幼い弟エデュアールの悪戯から示唆されました。残念にも彼は1914年から1918年の戦争で飛行士として亡くなりました。そのとき弟はまだ幼なすぎて、散水用の管を踏む腕白小僧の役ができません。そこで建具工場の徒弟デュヴァルに代わりました。彼は工場の梱包主任として42年間勤めたのち死にました。水を撒く男の役は、私たちの庭師クラルク氏にお願いしました。彼も40年間工場で働いたあと、彼はなお元気です。ヴァランス近郊に引退されています。<sup>(33)</sup>

これらルイ・リュミエールの作品は映画史上最初の古典となり、多くの知識人や映画監督に深い影響を与えてきた。また、『水を撒かれた庭師』をはじめ若干の代表作に関しては、

製作の過程や映像の構成をめぐる綿密な分析と評価もなされている。<sup>(34)</sup>ただし、本稿の主要な課題はシネマトグラフ一般公開の状況を究明するところにあり、個々の作品に対する精細な考察は他日に譲らざるをえない。

# 【 註 】

本稿において筆者がしばしば参照した書物は下記の略号で示される。

- Bhp* : Claude BELLANGER et al., *Histoire générale de la presse française*, Paris, Presses Universitaires de France, 1972. tome III.  
*Cl* : Bernard CHARDERE, *Les Lumières*, Lausanne, Payot Lausanne, 1985.  
*Cls* : Bernard CHARDERE, *Les Lumières sur Lumière*, Lyon, Institut Lumière, 1987.  
*Ch* : G.-Michel COISSAC, *Histoire du cinématographe*, Paris, Cinéps et Gauthier-Villars, 1925.  
*Dv* : Jocelyne Van DEPUTTE, *Vie et histoire du IXe arrondissement*, Paris, Editions Hervas, 1986.  
*Fm* : Huguette Marpuand FERREUX, *Musée du cinéma Henri Langlois*, Paris, Maeght Editeur, 1991. tome I.  
*Hd* : Jacques HILLAIRET, *Dictionnaire historique des rues de Paris*, Paris, Editions de Minuit, 1963. 2 volumes.  
*Ra* : Jacques RITTAUD-HUINET, *Auguste et Louis Lumière, les 100 premiers films*, Paris, Philippe, Sers Éditeur, 1990.  
*Rc* : Jacques RITTAUD-HUINET, *Le Cinéma des origines, les frères Lumières et leur opérateurs*, Seyssel, Champ Vallon, 1985.  
*Shg* : Georges SADOUL, *Histoire générale du cinéma*, Paris, Denoël, 1973. tome I.  
*Slm* : Georges SADOUL, *Lumière et Méliès*, Paris, Lherminier, 1985.  
*Sa* : Léo SAUVAGE, *L'Affaire Lumière, du mythe à l'histoire*, Paris, Lherminier, 1985.  
 オエタ : 岡田晋著『映画の誕生物語』美術出版社, 1980年。

- (1) *Ch*. p. 185. *Slm*, p. 35. *Hd*. tome I, 266. オエタ, p. 28.
- (2) *Dv*. pp. 94-95. *Hd*. tome I, pp. 265-266.
- (3) *Dv*. pp. 59-61, 65-68. *Hd*. tome I, pp. 264, 266. Musée Carnavalet, *Les Grands Bourvards*, Paris, Paris-Musées, 1985. pp. 176-179.
- (4) *Ch*. p. 185. *Slm*, p. 35. グラン・カフェは1914年に取り壊され、クック旅行会社の営業所になった。1923年に古きバリ保存協議会ペローの提唱によってこの建物の外壁につぎのような標示板が掲げられた。「リュミエール兄弟が発明したシネマトグラフによって、1895年12月28日ここで活動写真の公開が初めてなされた。」ただし、標示板の文言について相当の紛糾があり、1945年映画創出の功労者として、レイノー、マレー、ドゥメニ、リュミエール、メリエスを記念する別の標示板が同じ建物に付けられた。*Sa*. pp. 9, 17-19. オエタ, pp. 14-15, 42-44. なお、現在この建物では若緑に装飾された階段が街路から地階へ通じ、瀟洒なロビーとレストランのほか、アントワヌの間、ルイの間、オーギュストの間と名づけられた三つの特別室がある。
- (5) Victor PERROT, *A Paris, il y a soixante ans, naissait le cinéma*, Paris, 1955. p. 6.
- (6) *Ch*. p. 187. *Slm*. p. 35.
- (7) *Sl*. p. 35. *Cl*. p. 94-95.
- (8) *Slm*. p. 35.
- (9) Georges MELIES, *La Semaine cinématique*. cité dans *Ch*. p. 192 et *Slm*. p. 103.
- (10) *Slm*. p. 103. *CL*. p. 96.
- (11) Francis DUOBLIER. cité dans *Cl*. p. 96.
- (12) MELIES, *op. cit.* cité dans *Ch*. p. 192 et *Slm*. pp. 103-104. 因みにメリエスは懇請を退けられ、つぎのように忠告された。「若い方よ。私に感謝してください。あなたを破滅させないために、私の発明を売らないのです。しばらくは珍奇な科学的見世物として開発されるでしょう。そうした期間を過ぎれ

ば、これに商業的な未来などないのです。」この信念は次男ルイ・リュミエールの言葉としてしばしば引用され、発明者自身がシネマトグラフに大きな期待を寄せなかった証左とされる。しかし、1945年ベッシーおよびロ・デュカへ宛てた書翰において、ルイはこれを父アントワースの応答と明言している。*Slm*, p. 83.

- (13) Le cinéma à 75 an, Hélène Dieudonnée raconte. dans *Le Monde*, 24 décembre 1970. p. 13.
- (14) *Ch*. p. 190. *Slm*. pp. 20-21. *Sa*. p. 89.
- (15) Jules CARPENTIER, Lettre à Louis Lumière du 30 décembre 1895. cité dans *Ch*. p. 190.
- (16) Louis LUMIERE, Lettre à Jules Carpentier du 31 décembre 1895. cité dans *Slm*, pp. 36-37.  
 なお、1895年12月28日にルイ・リュミエールがインド広間にいなかったこと、またそこでメリエスに対応したのが父アントワースにはかなならぬことは、1946年サドゥールとの第1回対談でも確認された。  
*Slm*. p. 83.
- (17) *Cl*. p. 99. *Slm*. p. 38.
- (18) Clément MAURICE. cité dans *Cl*. pp. 99-100.
- (19) *Slm*, p. 37. Avec M. Léopold Maurice. dans *Cinématographie française*, numéro spécial (novembre 19359). p. 41.
- (20) Comtesse Jean de PANGE, Comment j'ai vu 1900. dans la *Revue des Deux Mondes*, avril 1962. p. 4329.
- (21) Première affiche du cinématographe Lumière signée Henri Brispot et lithographie en couleurs, signée Auzolle, "Affiche illustrant le succes de l'Arroseur arrosé". dans *Fm*. tome I, pp. 72, 77. *Slm*. p. 47.
- (22) *Cl*. pp. 105-106. *Ra*. pp. 228-239.    なお、サン・ドニ大通りの映画館開設については1896年10月や1897年3月とする記述もある。*Slm*. p. 47. *Rc*. p. 34.
- (23) *Bhp*. tome III, pp. 295-303. 365-366. *Slm*. p. 37.
- (24) *Le Radical*, 30 décembre 1895. dans *Slm*. pp. 101-102.
- (25) *La Poste*, 30 décembre 1895. dans *Slm*. p. 102. オエタ, pp.16-18
- (26) *Bhp*. tome III, p. 387. *Cl*. pp. 104-105.
- (27) *Le Monde Illustré*, 25 janvier 1896. pp. 70-71. cf. *Slm*. pp. 102-103. やや通俗的な絵入り雑誌『マジジン・ピクレスク』も同年3月号にシネマトグラフに関する記事を載せた。*Le Magasin pittoresque*, mars 1896. dans *Slm*. p. 103.
- (28) Geoges COLOMB, *Le Petit français illustré*, 23 mai 1896. cité dans *Cl*. p. 106.
- (29) *Slm*. p. 37.
- (30) *Cl*. pp. 100-101. *Slm*. p. 37.
- (31) Premier programme du cinématographe Lumière au Grand Café. dans *Slm*. p. 34.
- (32) Entretiens avec Louis Lumière, Sa dernière interview. dans *Slm*. p. 94.
- (33) *Ibid.*, dans *Slm*. pp. 94-95.
- (34) たとえば、サドゥールは諷刺画家エルマン・ヴォーケルと『水を撒かれた庭師』の類似性に論及した。*(Shg. tome I, pp. 294-299.)* また、リュミエールの映画は現実を記録したものと一般に評価されるが、入念に考えられた構造と演出によることを、小松弘は明らかにしている。*(小松弘著『起源の映画』青土社, 1991年. pp. 78-95.)*

(平成4年8月3日受理)